

来日講演：スコットランドのアイデンティティ

T・C・スマウト、富田 理恵訳⁽¹⁾

〔訳者解説〕

本稿は、1997年9月に、日本学術振興会の招きで来日した、英国セント・アンドルーズ大学のT・C・スマウト教授(スコットランド社会史、環境史専攻)の講演原稿の一つを翻訳したものである。原題を、Scotland in Britain: Perspectives on an Identityとする本講演は、一橋大学で行われた。スコットランド人の複雑な民族意識のあり方を、簡潔に図解して説明し、歴史的由来について考察したものである。なお本講演は、スコットランド議会開設の可否について住民投票が行われたのとほぼ同時期に開かれた。その後事態は進展し、スコットランド議会は1999年7月に正式に発足した。したがって、講演において将来の事柄として述べられたことが、すでに現実となっている。このように時間的に前後する部分があるものの、本翻訳ではスコットランド人の自己認識と将来の展望について、優れた洞察を含む講演の内容を原文に忠実に翻訳した。

はじめに

スコットランドは、人口550万人の小国である。かつては独立国であったが、イングランド、ウェールズと数世紀の間ユニオンで結ばれ、グレート・ブリテンという政治的統合体を形成している。ユニオンは二段階からなる。最初のユニオンは、王冠を共有する1603年の連合である。この時スコットランドの王ジェームズ6世は、エリザベス女王からイン

グランドの王冠を継承し、ロンドンに向かった。次のユニオンは、1707年の議会の合同である。この時、スコットランドは独自の教会、法制度、教育の伝統を残したものの、独立の立法府を持つことをやめ、イングランド議会と合同した。

新労働党政権が、スコットランド自治議会(Parliament, Assembly)を提案しているとはいえ、1707年以来スコットランドに立法府はなかった。もし新政権の提案が実行されれば、グレート・ブリテン(20世紀に正式にはグレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国と呼ばれるようになった)は、形を変え連邦国家に似た形となるであろう。すなわち、スコットランドとウェールズは自治議会を持ち、北アイルランドに地域議会(an assembly)が再建され、時至ってイングランドに地方議会(new regional assemblies)ができるであろう。しかし中央政府の権限はウェストミンスター議会に残る。もしこうなれば、ヨーロッパの中で連合王国の国制は、ドイツやスペインに似る。なお中央権力の集中が著しい今日〔訳注 1997年〕の状況は、フランスに近い。

自治議会の提案に対するスコットランドの政党の立場は、次の通りである。1997年5月の総選挙において、労働党が約半数の票を集めた。自由民主党(Liberal Democrats)は、11%の票を得る。労働党と自由民主党は、税率を一定範囲内で変える権限のあるスコットランド議会の確立を主張し、議会の成立に

よって、国制改革が推進され、連合王国が時代にふさわしい形となると確信する。得票数の17%を得た保守党は、スコットランド議会の成立に反対している。保守党によれば、議会の成立はスコットランドとイングランドのユニオンの不安定化を招き、ついには保守党の望まない連合王国の終焉をもたらすからである。一方スコットランド国民党(SNP)は、約四分の一の支持を集めた。提案されているスコットランド議会は、ロンドンにあるブリテン議会の下位にあり、それには満足できないというのが、SNPの態度である。すなわち、SNPは完全独立を求めているのである。

端的にいえば、将来のスコットランドの国制に関して、スコットランド内の意見は大きく割れている。しかし、スコットランド内の意見の不一致は今回が初めてではない。有権者の40%以上の賛成で成立という条件で、労働党政府は1979年に自治議会の可否について住民投票を実施した。結果は、約三分の一が賛成、三分の一が反対、三分の一が棄権し、自治議会の提案は否決されたのである。これに対し1997年の住民投票は、投票総数の過半数で成立するという条件となった。不確定ながらも大方の予想するところは、連邦的な連合王国の枠組みの中で、ウェストミンスター議会の下位に位置する課税権付きのスコットランド議会在、承認されるという道筋である。その際、連合王国は連邦的な枠組へと再編成されるであろう。しかしスコットランドの将来像は、まだ見えてこない。というのも、スコットランドの政治的なアイデンティティが、基本的なところで揺らいでいるからである。スコットランドは、みずからをどう規定するのだろうか。地方(region)であるのか、ネーションなのか、あるいは国家(state)となるのだろうか。これがわからないままどうして将来の望ましい国制のあり方が見えてくるだろうか。

この講演では、20世紀のスコットランド人のアイデンティティの性格を掘り下げて検討したい。もっともこれは、世界の諸地域に共

通する問題の事例研究といえよう。ナショナル・アイデンティティとは何か。他のアイデンティティとどのように折り合うのか。ネーションと国家は、同義語なのだろうか。この問いに対する答は、日本やデンマークのように、おおよそ一つの言葉、一つのネーション、一つの国家となっている限り、比較的簡単である。しかし、たとえばインドやユーゴスラヴィアにおいて、アイデンティティと国家をめぐる問題は一筋縄でいかず、こうした地域の緊張状態から、今後どのような事態が発生するか予測できない。というのも、ここ数十年の間インドの分裂が予言されてきたにもかかわらず、現実のインドに大きな変化はなかった。一方戦後数十年の間、旧ユーゴスラヴィアは統合されていた。しかし旧ユーゴは解体した。

そしてスコットランドである。ヨーロッパのナショナリズムの研究者にとって、スコットランドの存在は、不思議なものに映る。かつては独立王国であり、中世期何百年の間イングランドとの戦いに明け暮れた。1707年に議会の合同が成立した時、この合同が買収によってもたらされたと考える人は当時も(今も)多くいた。合同に賛成したスコットランド貴族を、「イングランドの金で買収され、スコットランドを売り渡した」と、ロバート・バーンズは詠ったのである。

1707年の合同時に、スコットランドは独自の教会と法と大学を保持した。したがって、フランス革命に始まる近代ナショナリズムの黎明期に、独自の制度を基盤に反乱が起きても不思議はなかったはずである。

なぜスコットランドは、19世紀や20世紀の初頭にアイルランドのように、武器をもって立ち上がらなかったのだろうか。一方ノルウェーは、平和裡に独立を宣言した。スコットランドにこのような選択肢がなかったのだろうか。ヴィクトリア時代のスコットランドには、イングランドと戦ったウィリアム・ウォレス(映画『ブレイブハート』の主人公)の勝利と、敵の手にかかったその死を記念する巨

大な塔が建立された。このように19世紀には、ロマン主義的なナショナリズムによって生み出された建造物が遺された。これらは、独立への足がかりともなりうる動きであった。

著名なマルクス主義の理論家に、トム・ネアン(Tom Nairn)がいる。19世紀におけるロマン主義的ナショナリズムの興隆にもかかわらず、それが独立をめざす政治運動に結びつかなかったのは、ネアンによれば、スコットランドの中産階級がブリテンと大英帝国の繁栄を大いに享受したため、ナショナリズムを単に感情のレベルに留めておくことが可能であったからである。しかし大英帝国も今は昔となり、ブリテンも経済のみれば、一流といえなくなってしまった。しかしなぜ、ブリテンの連合はいまだに解体せず、スコットランドはなぜ独立を求めないのだろうか。東欧における共産主義政権崩壊の後には、各地にナショナリズムの覚醒が見られ、リトアニアがソ連邦から独立し、スロヴァキアがチェコ共和国から分離した。しかしこの波がスコットランドに及ぶ兆しはない。というのも世論調査によれば、SNPへの支持は、一旦上昇しても大きく下降するというサイクルを繰り返しているからである。具体的な数字を挙げてみよう。1991年の世論調査では、支持が30%に達していた。しかし1992年の総選挙では、約20%の得票(72議席中4議席の獲得)にすぎなかった。さらに1992年から97年までの保守党政権下で、SNPへの支持は、1995年のピークの時に再び30%を越えた。しかし前回と同様、1997年の総選挙では、23%の得票に落ち込み、72議席中6議席を確保したにとどまった。すなわちナショナリストの大義は、翼を広げたあひるのように、飛び上がっても池に落下するのみで、離陸できない。これには、スコットランド人のアイデンティティのあり方が複雑に絡んでいるのかもしれない。

I アイデンティティとは何か

一方、スコットランドに単一のアイデンティ

ティなど存在しないと見る人もいる。スコットランドは小国でありながら、多様な地域と文化を持つ。アウト・ヘブリディーズに住んでゲール語を話し小規模の厳格な長老主義の教派に属する熱心な信者もいれば、昔ながらの小農(crofter)もいる。グラスゴーには、なまりの強い英語を話すソフトウェアの技師もおれば、アイルランド系のカトリック教徒や、特定のフットボールチームの熱烈な信奉者であっても特に信奉する宗教を持たない人もいる。こうした多様な人々に共通のアイデンティティがあるといえるのだろうか。しかしここに誤解がある。一人の人がもつアイデンティティは、一つに限られないのである。政治学者アンソニー・スミス(Anthony Smith)の示唆するところによれば、人の持つ忠誠心の対象は複数あり、思い入れの強さも時に応じて変化する。ナショナル・アイデンティティの問題も、この枠組で考えるべきなのである。それを図式的に説明しよう。複数の忠誠の対象は、一個人を中心とする同心円状に広がっていると考えられる。すなわちスコットランドに住む人々が、領域的な枠組によるアイデンティティとして、「私は何者なのか」と自らに問う時、その答は複数の同心円として想定されるのである。さらに、一個人を起点に直線が放射状にいくつか伸びており、同心円と交差している。これらの放射状の直線は、領域的な性格を持たないアイデンティティを表す。こうした(職業や宗教などによる)アイデンティティは、領域的なアイデンティティを強める場合もあれば、そうでない場合もある。以上の関係は、図示することでわかりやすく提示することができる(Fig.1)。

この図式は、正確なモデルというよりも、考えを進めるための補助的な図式である。そこでは、一個人を中心として7つの同心円が描かれており、図式全体でその人が持つ世界観を示している。

個人をめぐる一番近くの同心円は、家庭や家族(Home and family)に対するアイデンティティを示す。人間として最も直接的な社

スコットランドのアイデンティティ

会的アイデンティティは、親子、もしくは一個人の一世代前と一世代後の家族の成員に向けられる。

二番目の同心円は、親族やクラン(Kin or clan)、苗字に対するアイデンティティを示す。これらへの忠誠は、今や時代遅れとなり(大半のスコットランド人の心に)痕跡をとどめるにすぎないが、たとえば17世紀以前には、これより外にあるどのアイデンティティよりも強い力を発揮した。

三番目は、「私はグラスゴー人」といった地元(Locality)に対するアイデンティティを示す。これはスコットランドに特に強く見られるアイデンティティである。グラスゴーとエディンバラのライバル意識はつとに有名である。ただしこれは二大都市に限らない。Fifer(私もそうだが、ファイフ地方の住民)、Aberdonian(アバディーンの住民)、スカイ島の出である、といった事柄は本人にとって重要なアイデンティティなのである。

四番目はネイション(Nation)へのアイデ

ンティティ、すなわち、スコットランド全体への帰属意識である。「あなたは、スコットランド人ですか」と問われた時、アウト・ヘブリディーズから国境地帯までの人はみなYESと答える。ところで、オークニ、シェトランド諸島の人に同じ質問をしても、みなYESと返事すると限らないのはおもしろい現象である。ここの人々は海峡を渡って本土に行くことを「スコットランドに行く」という。スコットランドへの帰属意識がやや希薄なのは、オークニ、シェトランドが、15世紀後半までノルウェー＝デンマーク領であったことによる。デンマークの王女がスコットランド王家に嫁ぐ際、両諸島は結婚持参金の担保となった。しかし持参金はついに支払われなかったため、スコットランドに帰属したのである。

五番目は国家(State)を示す。「あなたはブリテン人ですか」との問いにYESと答える。オークニ、シェトランドの住民もまた他のスコットランド人も、この問いにYESと答え

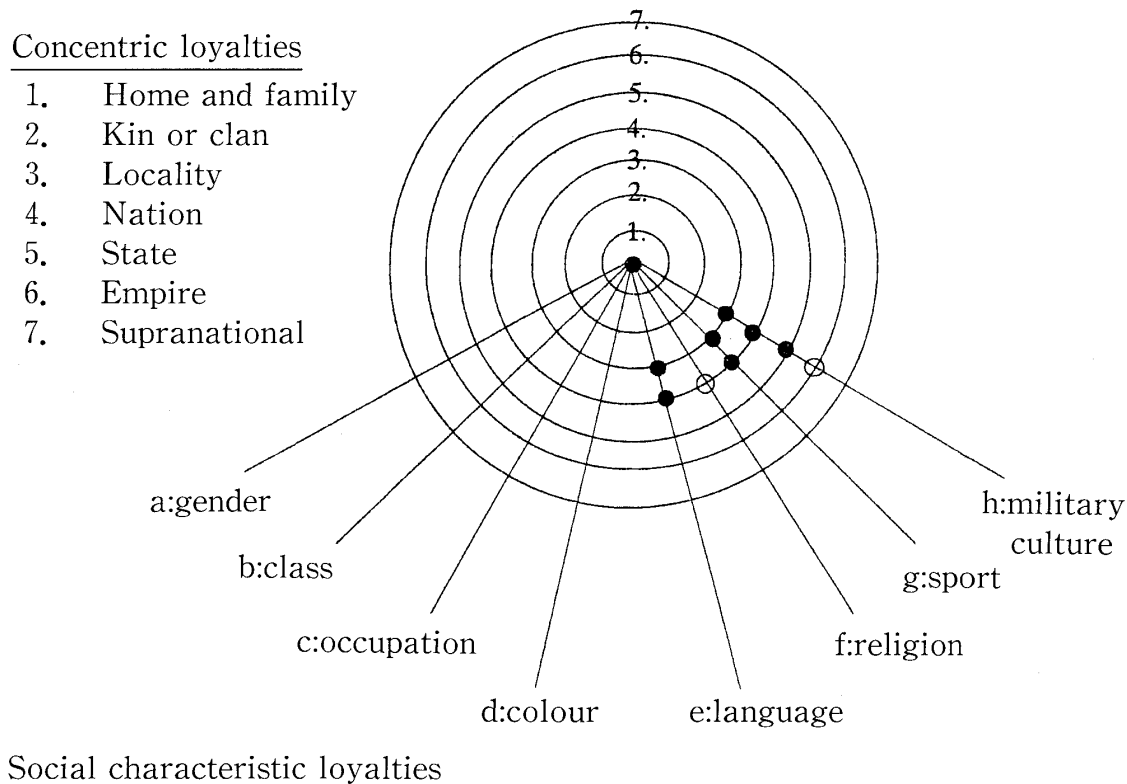


Fig.1 SCOTTISH IDENTITY

る。

スコットランドの抱える最大のジレンマは、デイヴィッド・マクロン教授の「国家なきネーション」という言葉に要約されよう。すなわち、四番目の円と五番目の円とが一致しない、つまりネーションに対する忠誠と国家への忠誠とは同じではない、というジレンマである。日本やデンマークのような国では、ネーションと国家への忠誠とは、同じものだが、スコットランドのようなケースも少なくない。スペインにおいて、カタルーニャ人やバスク人は、カタルーニャ民族やバスク民族(ネーション)に帰属すると考える一方、スペイン国家にも属していると考え。もっとも、バスク人の中にはバスク国家への期待も強い。フランスでは、ブルターニュ人は独自性を意識しているが、フランス国家に属することを認めている。同様にバヴァリア人も他のドイツ人との差異を意識するものの、ドイツ国家に帰属する。カナダにおけるフランス系カナダ人は、おそらく異なるネーションに属しているといえるものの、いまのところ分離独立するには至っていない。

一方、グレート・ブリテンにおいてはスコットランド人とウェールズ人は、ネーションへの忠誠とブリテン国家への忠誠とを明確に区別する。しかし、イングランド人は区別しない。これは、好奇心をそそられる点である。イングランド人は(外国人の場合と同様に)イングランドとグレート・ブリテンとを混同するのである。マーガレット・サッチャーやウィンストン・チャーチルに限らず、イングランド出身の首相が、ブリテン全体に対する忠誠心から、イングランドという小さな領域への忠誠心を区別するなどとは、考えられない。また、イングランド人はみな、ユニオンジャックを自分たちのネーションの旗と考える。しかしスコットランド人は、習慣的にスコットランドという小領域と、ブリテン全体とを区別し、ネーションの旗もまったく異なっているのを知っている。すなわち、サルタイア(青地に対角線状の白十字)と後ろ足で

立ったライオン(黄地に赤の動物の紋章)が、スコットランドの旗である。

六番目の忠誠心の対象は、英帝国(Empire)である。もはやその実質は失われた。しかし200年間大きな意味を持っていた。

七番目の円は、国家の枠を越えた(Supranational)制度に対する忠誠心を示す。しかしこうした忠誠心は理想的な段階に留まっている。

たとえば、ヨーロッパ人としてのアイデンティティや国連への参加意識が奨励されことはあっても、スコットランド人が(他の諸民族でも)、現実にこの種の帰属意識を強く持つことはほとんどない。たしかに、スコットランド人が家族や親族、スコットランドやブリテン、そして英帝国のために命を捧げることにはありうる。しかしヨーロッパや国連のために喜んで命をかけることは、ないであろう。平均的なスコットランド人は、EUや国連の存在意義やそれらが機能している現実を認めている。しかしヨーロッパ人意識を熱烈に掲げているのではないし、国連の大義に献身しているともいえない。

この図表上の同心円と交差する直線が、非領域的なアイデンティティを示す。その中でジェンダー(gender)や職業(occupation)、階級(class)などのアイデンティティは、スコットランドへの帰属意識を強めたり打ち消したりする性格のものではない。たとえば、「医者である」というアイデンティティは、スコットランド人意識に特に結びつかない。一方、スコットランド人の医者であるといっても、国際学会などの状況でもない限り、日本人の医者と特に接点を持つことはない。次に国際的な労働運動や女性運動の場合を考えてみよう。マルクスが呼びかけても、万国の労働者は団結しなかった。同様に世界の女性たちも団結しそうにない。また労働組合や女性運動の国際会議も開かれている。しかしこのような国際的な場において、共通の目的のため協力することがあっても、領域的なアイデンティティを打ち消すほど強力な幅広い運動を

作り出すことはないであろう。

人種は、上記のアイデンティティとは微妙に異なる範疇に属する。というのも大半のスコットランド人は白人で、たとえば、インド系のスコットランド人が真正のスコットランド人とは一般に考えられにくいからである。ところで、アメリカ合衆国のグランドファーザー・マウンテン(Grandfather Mountain)では、毎年スコットランド系アメリカ人によるハイランド・ゲームが行われる。その会場には、マケンジと名のる18世紀のスコットランドの毛皮商人の子孫であると称するアメリカインディアンの酋長が、頭からつま先に至るまでハイランドのタータンを着て登場する。このようなアメリカでの例をモデルに、スコットランド人の範疇を幅広く考えても良いのかもしれない。さて、スコットランドも他の西欧社会と同様に、人種や移民をめぐる問題を抱えているのは事実である。けれどもスコットランドが人種差別的な社会として、特に悪評高いとはいえない。イングランドの一部には差別的な地域もあるが、スコットランドは少数民族に寛容にみえる。また、スコットランド人が白人だからといっても、他地域の白人との間に特に強い絆を感じているわけではないし、白人優越主義という国家の枠を越えた人種主義に傾斜することもない。すなわちスコットランド人は、一般的に白人であると認識しているが、この点に特別の価値は置かないのである。

これから述べる非領域的なアイデンティティのあり方は、同心円状の領域的なアイデンティティのあり方と大いに関わっているので、興味深いところとなるだろう。両者の関係を示す同心円と直線との交点は、●のように黒く塗りつぶしてあったり、○のように塗りつぶしてなかったりする。●は、現在でも影響を及ぼしあっている関係であり、○は影響関係が主に歴史的なもので、今日には及んでいないという関係を示している。たとえば、言語(language)(ゲール語の話し手か、英語の使用者かの問題)は、むしろスコットラン

ドを区分する要因である。過去においては、ゲール語の話し手の割合がもっと高かったので、分断の様相は一段と深かった。今日において言語は、(三番目の同心円の示す)地元への帰属意識を強くする作用を持っている。というのも、少なくともハイランド人はゲール語によってゲール世界へのつながりを想起できる。また、言語は(四番目の同心円の示す)スコットランド人意識やナショナリティを、弱体化させるどころか、現在はそれを補強する役割を果たしている。ナショナリストの伝統の中には、ゲール語を話すスコットランド人こそ、本物とみる流れがあるからである。

宗教(religion)が大きな力を発揮していた時代には、スコットランド人は宗教によって団結し、また宗教によって分断された。16世紀のスコットランドに、比較的短期間でプロテスタントのスコットランド教会が設立され、大多数の住民がその傘下に入った。そのため、スコットランド教会は、スコットランドのナショナル・アイデンティティ(四番目の同心円)を強化するのに大いに貢献したといえる。宗教改革前においてもスコットランドのカトリック教会は、スコットランド独自の聖人を顕彰しイングランドのヨーク大司教座からの独立を貫くために戦ったことから、中世の時代にスコットランドのアイデンティティを守ったといえよう。1707年の議会の合同においても、長老主義に立つナショナルな教会の独立は、議会法によって保証された。このスコットランド長老教会は、ナショナル・アイデンティティが保持される焦点となったばかりでなく、アングリカンや非国教徒とともに、プロテスタントのブリテンという意識とも調和した。そのため、ブリテンとしてのアイデンティティも生成されていったのである。したがって、18世紀から19世紀にかけて、そして今日に至るまで、スコットランド長老教会のメンバーは、スコットランド人であり同時にブリテン人であると意識し、しかもその二つのアイデンティティは決して同一ではない、と認識してきたのである。しかし教会

をめぐるアイデンティティは、19世紀に大きな変化を被る。スコットランドの法定教会は、「教会分裂」という名で知られる致命的な大分裂を経験した。そのため法定教会が、スコットランドのアイデンティティを専有することはできなくなってしまった。さらに、数千に及ぶアイルランド出身のカトリック教徒が移民として到来し、混乱に拍車をかけた。こうして教会が綻びを見せる中で、教会がスコットランドのアイデンティティを中心的に担うことはできなくなっていった。長老主義教会の一部には、1920年代に至るまで、カトリック教徒に「アイルランド人」というレッテルを貼り、スコットランドに不服従の者という印象を与えようとした。けれども結局この試みは失敗した。現在、新旧両教徒はともに各々の日曜礼拝に行く。カトリックであるというアイデンティティは、スコットランド人の帰属意識と完全に両立すると、今日ではみなされている。新旧両教会は、ともに社会の世俗化に直面している。今日の社会において宗教は、(無視はできないが)スコットランドのアイデンティティの形成に大きな意味を持ってはいないのである。

「私は何者であるのか」という自問に答を見いだす上で、20世紀後半に生きるスコットランド人にとり宗教以上に重要なのは、スポーツ(sport)である。サッカーは、伝統的にスコットランドのナショナル・アイデンティティを強め、ブリテンという帰属意識から切り離したり、これに敵対する役割を果たした。さらに(グラスゴー・レンジャーズ、ダンディー・ユナイテッドのように)地元意識も高める。ところで、スポーツを媒体とするアイデンティティの発現は、いかにもスコットランド的である。たとえばテキサスの人々は、アメリカの国内試合で地元テキサスのチームがノースカロライナと対戦する場合、地元チームを応援する。ただしノースカロライナのチームが勝ち進んで、メキシコチームと対戦した場合には、テキサスの人々はノースカロライナを応援する。ノースカロライナ

は、メキシコに対して「私の国(country)」を代表するからである。スコットランド人の反応は、これと対照的である。対イングランド戦でスコットランドを応援するのは、言うまでもない。けれどもイングランドが勝ち進んで、仮に日本と対戦してもスコットランド人が応援するのは、日本である。スコットランド人にとって、イングランドが「私の国(country)」などとは決して考えられない。スポーツの上ではイングランドは永久に「旧敵(auld enemy)」である。毎年競技場での戦いが、中世のウォレスやブルースの戦いにかわって、繰り広げられるのである。

最後に、軍事に関する文化(military culture)に触れていきたい。これは重要である。スコットランド人は何百年もの間、戦闘的な民族(nation)として知られていた。近年の研究においても、15世紀初頭において、戦闘に参加可能な10人の男子のうち約1名の割合で、「旧敵」イングランドと百年戦争を戦うため、フランス軍への従軍に登録していた。17世紀においても軍役につく割合は高かった。数万人ものスコットランド人がスウェーデン、デンマーク、ネーデルランド、ロシア、ポーランドの傭兵軍の中にいた。亡命スチュアート朝の支持者たちでさえ、麗しのチャーリー王子とジャコバイトの大義の敗北が1746年に決定的となると、政府の恩顧を求めて帰国し、自らのクランから連隊を編成して、ジョージ王のためフランス人やアメリカ人と戦った。たとえばゴードン(the Gordons)、アーガイル(the Argylls)、ブラック・ウォッチ(the Black Watch)、サザランド・ハイランダーズ(the Sutherland Highlanders)、シーフォース・ハイランダーズ(the Seaforth Highlanders)などの特にハイランドの連隊が、ナポレオン戦争、クリミア戦争、ボーア戦争と20世紀の二つの世界大戦の精鋭部隊を形成した。ユニオンによって、スコットランド人の軍事的才能が、大英帝国の勢力拡大のために引き出された。湾岸戦争においてすら、スコットランド人の貢献は人口比に不釣り合いな程

大きかったのである。1960年代以降スコットランドの連隊の併合や、軍隊からスコットランドというアイデンティティを取り去るような提案がなされるたびに非難の嵐が巻き起こり、その存続のために、スコットランド議会開設やその他の政治目的でも集まらないほどの多くの請願署名が寄せられる。こうした軍事的伝統は'Save the Argylls'といった地元意識やスコットランドに対するナショナル・アイデンティティを強める。さらに、命をかけての戦いはブリテン国家に対する奉仕であるために、ブリテンへの帰属意識を強める。同様に、かつては大英帝国への忠誠にも向かっていたのである。スコットランドの社会史家や政治学者は、概して研究者自身が軍事に親近感を抱かないため、スコットランドの軍事的な伝統の果たした役割を過小評価しがちである。

今までの議論をまとめてみよう。私たちが最初に示した点は、スコットランドのアイデンティティという、独特のナショナル・アイデンティティは、家族から国家を越えた枠組みにまで至るさまざまな領域的なアイデンティティの一つに数えられるという点である。しかも、その領域的な帰属意識の中には、ブリテンへの帰属意識も存在し、スコットランドの帰属意識と衝突するというよりも、共存するかたちとなっているのである。二点目にいこう。同心円状に示された領域的なアイデンティティに、交差するアイデンティティの中には、(ジェンダーや階級、職業のように)領域的なアイデンティティにほとんど何の影響も及ぼさない帰属意識もあれば、(言語、宗教、スポーツ、軍事的伝統のように)相互に大きく影響を及ぼす帰属意識もある。概して後者の場合には、四番目の忠誠心(ネイション)と五番目の忠誠心(国家)との区別を示しながらも、一すなわち、スコットランド人であることとブリテン人であることが完全には重ならない点や、ネイションと国家との相違点を明らかにしながら一方が他方を排除するのではなく両者が共存している点も、確かめ

られるのである。

さらに重要なポイントがある。現代のスコットランドのアイデンティティは、血統による帰属意識というよりも、土地に対する帰属意識から成り立っているという点である。私の先祖がスコットランド人なので私はスコットランド人であるというよりも、私はグラスゴー出身のスコットランド人であるというほうが、より自然に受け入れられる。祖先がスコットランド出身というので、自分がスコットランド人であると主張するアメリカ人に、スコットランド人は困惑しがちである。困惑の原因の一部には、スコットランド人意識が今や血統的な性格のものではない点がある。スコットランド系のアメリカ人は、スコットランドの土地と現代のスコットランドの大衆文化とは異質の、血統のアイデンティティを強調するが、その系図を基盤とした民族意識(ethnic consciousness)は、スコットランドでは贗物であるかの如くに思われている。すなわちスコットランドに住むスコットランド人は、他国に住む人を血統の主張だけでスコットランド人とは認知しないのである。

スコットランドでは親族関係が非常に重視された歴史や、今日に及ぶゲール社会での親族の大切な意味を考えると、スコットランドのアイデンティティが血統によって決められるのではないのは、意外であると受け取られるかもしれない。しかしこれは真である。たしかに親族関係も一つのアイデンティティであるが、ナショナル・アイデンティティの基盤にはなりえない。中世や近世の時代に、スコットランドを一つの政府が統治した。すでにこのスコットランドは、ゲール語地域のハイランドとスコットランド語を使用するローランドに分かれ言語的にも民族的(ethnically)にも多様な地域を包含していた。したがってスコットランドの統治者は、まず親族や民族(ethnicity)の枠を越える忠誠心を訴える必要があった。そこで持ちだされてきたのは、君主個人に対する忠誠心であり、次にその君主が統治する領域の統一性である。このよう

な経緯があったために、後世にも大きな混乱なく、あらゆる種類の移民をスコットランドに統合していくことができた。19世紀のアイランド移民の存在は特に重要である。アイランド人が、スコットランドの工場、鉱山、造船所で働くため数万人の規模で移民してきた。しかし今日、生粋のスコットランド人であることを主張する際にも、先祖がどこから来たかを問われることはない。スコットランド人であるには、本人が、たとえばグラスゴーのようなスコットランドの土地の出身というのみで、十分である。血統は問題でなく、決定的なのは出身地であるため、スコットランドでは民族浄化などの動きは、決して起きないであろう。

II ナショナル・アイデンティティと ナショナル・ヒストリー

さて、本題に戻ろう。スコットランドが通例に準じない点があるとすれば、それは、ナショナル・アイデンティティと国家のアイデンティティとは同じでない、幅広い人々が考えている事実であろう。ただしアンソニー・スミスは、スコットランドのアイデンティティのあり方が、ヨーロッパの特殊例ともいえない点を明らかにした。類似のケースとして、ドイツの中のバヴァリア、スペインのカタルーニャ、フランスのブルターニュが挙げられる。これらの地域で、忠誠心は複数の同心円のかたちに表示される。すなわち、大半の人々はバヴァリア人であると同時にドイツ人であり、カタルーニャ人かつスペイン人であり、ブルターニュ人でありながらフランス人であることに納得している。そうはいつでも国家のアイデンティティと同義語でないナショナル・アイデンティティの存在は、なじみが薄く一筋縄ではいかないので、さらに検討を加えていこう。

ナショナル・アイデンティティは、歴史との関連から形成される。日本人であれば、日本の歴史を自らの歴史として振り返ることだ

ろう。デンマーク人も同様である。しかしもっと正確に言えば、ナショナル・アイデンティティは、一般の人々に浸透した歴史についての、ほとんど神話の域に属するような考え方から生まれてくるといえる。この「神話」の前には、現代の歴史家が学術的に解明した真実や重要性も無力である。たとえば、イングランドの子どもはみなロビン・フッドがいて、ロビン・フッドの歴史的事実を論じても意味があるだろうか。ジョージ・ワシントンがりんごの木を切り倒した逸話が、すべてのアメリカの小学校で語られているのに、それが実話でなかったらどうだということのだろうか。スコットランドの学童がスコットランド史について知っているのは、こうした半ダースほどの「神話」である。最初のそして最重要の「神話」は、スコットランドが1314年にバノックバーンの戦いでイングランドを破った事件である。次は1513年の、スコットランドがイングランドに敗れたフロドンの戦いである。しかしこの英雄的な悲劇の後も、スコットランドはネイションとして存続した。「神話」は、悲劇のヒロイン、スコットランドのメアリ女王に及ぶ。イングランドのエリザベスと王位を争ったため、1587年に処刑されてしまった。時代が下って、麗しのチャーリー王子も、やはり悲劇の英雄である。1746年のカロードンの戦いの敗北後、ハイランド人は虐殺された。19世紀のハイランド清掃では、数千もの家族が牧羊のため立ち退きを余儀なくされた。直接にイングランド人の仕業とはいわないまでも、イングランド化したレルドに責任が帰された。赤いクライドサイド(Red Clydeside)と呼ばれる第一次大戦後の労働運動に共感を寄せるのは、マルクス主義の立場に近い少数派かもしれない。この見方に立てば、革命の成立を阻んだのは、イングランド化した雇用者側とブリテン国家である。これらの重要な「神話」には、みなイングランドやイングランド的な価値との対決が登場する。ところが、最初の「神話」(約700年前)以外は、スコットランドの悲劇であ

り敗北である。ただし、ある流行歌が歌うように、スコットランドは常に”勇者スコットランド”であった。こうした感情はスコットランド人に誇りを与えているものの、同時に、スコットランドは敗北を運命づけられているという諦めも生んだ。これが、スコットランドは独立してもやっていけるという確信を弱める要因となったと、私は考える。

スコットランド人に特有の歴史の見方を、もう一点指摘したい。スコットランド人の親は概して、学問的な(‘serious’)スコットランド史を、感化を与えず、役に立たず、重要でないという判断によって、主要科目には数えず学校や大学で子供達に必須とするには及ばないと考えるのである。コリン・キッド(Colin Kidd)が近年刊行した名著で示したように、スコットランド人の親のこのような態度は、18世紀のスコットランド啓蒙期の偉大な歴史家、デイヴィッド・ヒューム(David Hume)とウィリアム・ロバートソン(William Robertson)に大きく由来する。両者はともに、文化的でまじめな(serious)な人物ならばスコットランド史を魅力的と考えるはずがない、と決めてかかった。啓蒙的でないというのが、その理由だった。すなわちスコットランド史は、自由についてもイングランド史のように、個人の自由と財産を保証する歩みという筋書きはない。また繁栄や豊かさにおいても、イングランド史のように帝国への発展や経済成長という成功物語に欠けている。啓蒙主義にとっては、1707年あたりから意味のある歴史が始まるのである。啓蒙主義者は、スコットランドに貧困と野蛮のレッテルを貼った。そのようなスコットランドの1690年以前のできごとは、忘れ去るのが一番で教える価値もないと考えたのである。さらに1707年以降のスコットランド史は、イングランド史、あるいはブリテン史の中に包摂されるのをよしとした。

こうして啓蒙主義によって、スコットランド人は歴史なき民とみなされたも同然となった。忘却の淵にあったスコットランド史を救

い出したのは、ウォルタ・スコット(Walter Scott)である。スコットは、スコットランドの歴史の中から逸話を取り出し物語に再構成した。話はおもしろく、ロマン主義に彩られている。(ただしスコット自身は、歴史的事実に注意を向け、知識も豊富であった。)そのためスコットランド人は、真剣に取り組むべき(serious)事柄としてイングランド史を位置付け、スコットランドの歴史を二流と考えたものの、波瀾万丈の物語を楽しんだのである。19世紀になると、イングランドからの独立戦争に活躍したウォレスとブルースには、昔の英雄にふさわしく彫像や塔やゆかりの教会が備えられた。これらは、まさにロマン主義をかきたてた。スコットランド女王メアリは悲劇の主人公としてオペラとなり、チャールズ・エドワード王子とジャコバイトは、ドン・キホーテのような若者の勇気と、私心や打算のかけらもない忠誠心の象徴となった。その一方でイングランド史が、家庭、学校、大学での唯一の学問的な(serious)ブリテン史として、不動の位置を保ち続けているのである。イングランド史は今日においても、自由をテーマとし、立憲的な発展を跡づける。もう一つのテーマは豊かさの獲得であり、経済成長の動向が研究課題となってきた。したがってスコットランドの大学においても、イングランド史のカリキュラムは、スコットランド史以上に重視されている。現代の教授達も、ヒュームやロバートソンを未だに乗り越えられないのである。

一方大衆文化の次元では、スコットの見方が、未だに主流となっている。スコットランド史は、波瀾万丈で逸話も多く時には道徳的教訓にもなる。さらに、史跡めぐりの観光産業にも素材を提供してきた。しかしスコットランド史が、真剣に取り組むべき(serious)テーマとは考えられてこなかった。こうしてスコットランド史が一段低くみられてきたために、スコットランドというネーションが、国家にふさわしい自信と能力を持つとは十分に自覚されずにいるのである。

III ナショナル・アイデンティティと ナショナルな制度

スコットランドのアイデンティティを伝えているのは、歴史意識のほか、スコットランド独自の制度となっている教会、法律、教育である。これらの制度は、1707年の議会の合同の影響を乗り切って存続した。しかしこうした制度も、一般の人々の歴史意識の場合と同じように、明確なメッセージを発信しているわけではない。次に、教会などのスコットランド独自の制度についても検討を進めていこう。

スコットランド教会についてみていこう。前述したように、19世紀までのスコットランド教会の影響力の大きさは、心に留めるべきである。しかし、イングランドに対抗するという意味における、教会の立場の曖昧さも強調したい。16世紀の宗教改革の成功は、イングランドによる新教徒支援の武力介入がなければ覚束なかった。ところでスコットランド語と英語とは、デンマーク語とノルウェー語のように同系語であるが、2つの言語として区別される。しかしスコットランドで使われる聖書や賛美歌は、スコットランド語ではなく英語に訳された。広範囲にスコットランド語の単語が英語に置き換わり、スコットランド語が一方言の地位に下った最も大きな要因こそ、教会の英語使用であった。スコットランド長老教会は、議会の合同時の取り決めにより、イングランド国教会の挑戦から守られた。また、ジャコバイトは主教主義者あるいはカトリックであったために、スコットランドの法定教会はハノーヴァ朝を擁護する立場となった。だからといって、法定教会のメンバーがイングランド化を好んだ形跡はほとんどない。スコットランド人は、プロテスタントの立場からみた教会の歴史を知ることによって、イングランドとの違いを再認識するものの、スコットランドが独り立ちできるという自信を得ることもなかった。

スコットランド法はどうであろうか。ス

コットランド法も、1707年のユニオン法において、国のかたちを失うことと引き換えに、法制度は独立を維持し、諸団体の持つほとんどの自由権も保持された。しかし法律家は、18世紀の改良運動の旗手として、近代化の先頭に立った。1745年以前には、この旗手の一部にジャコバイトも見られものの、大多数はハノーヴァ朝を支持し親イングランド的でユニオンにも賛成していた人々であった。19世紀に議会制定法の範囲が拡大すると、結局法的な独立の保証されている領域が、縮小することになった。多くの議会制定法は、スコットランド法の伝統をほとんど顧みないままに枠組みが作られたので、スコットランドの法律家は苛立ちを隠せなかった。ところで、法律専門職にはナショナリストも見かけるが、主流はユニオニストの系統である。

次に教育についてみていきたい。スコットランドの学校と大学の伝統は、1707年において、イングランドと異なっており、また今日においても両国間の教育制度の相違は消えていない。けれども、ブリテン国家と現在の経済動向の必要に応えようと、一定の方向に収斂してきたのも事実である。またスコットランドの大学の学長たちは、スコットランドが独立してナショナルなアイデンティティと国家のアイデンティティが一致する日を待ち望んでいるというわけでもない。学長たちはたとえ大学がスコットランドに位置しても、本質的にはブリテンの大学であるとみなし、またブリテンを舞台として活動すると自認しているからである。その理由の一つに、大学の教職の雇用市場が、ブリテン全体をカバーしそれが適切に機能している点が挙げられる。完全に自由な雇用市場であるならば、ブリテン中のスコットランド人の占める割合は10%なので、どのブリテンの大学も一割のスコットランド人教員がいるはずである。したがって、スコットランドの大学も理論的には、90%が非スコットランド人となる。ただし実際にはそれほど極端でないにしろ、やはり非スコットランド人がスコットランド人の数を大

大きく上回っている。大学の雰囲気も、ナショナリストというより、コスモポリタンな空気が強いといえよう。

ここでビジネス界の役割に言及したい。1707年のユニオンによって経済成長を可能にするさまざまな道筋が、次第に眼前に開けてきた。特にイングランドとの関係の深いたばこや砂糖などの植民地貿易や、繊維工業、重工業に発展の兆しが見えてきた。20世紀以前のスコットランドの企業は、ほとんどが家族経営であつものの、商品の販売先や金融サービスの顧客は、英帝国、イングランド、他の海外市場へと広がっていた。今日のスコットランドでは、アメリカ、日本、韓国を含む多国籍経営や海外からの投資への期待が高まっている。家族経営中心の古い伝統からみれば、活動の枠組として連合王国の枠以外にほとんど何も想定できない。近年の海外投資重視の立場にも、一部に不安の声があるものの、税率や関税の壁が低ければ、スコットランドの政治的独立にこの立場からの反対はないであろう。

スコットランドはイングランドに征服されたり植民地となったりしたのではなく、一部に腐敗があつたにしても当時の政治的な手続きに従って、パートナーとして合同したといえる。この事実を踏まえる時、スコットランド独自の諸制度とビジネスの現状は、自然の成り行きであるといえよう。すなわち、スコットランドの政治的エリートといえる聖職者、法律家、貴族と商人は、ブリテン国家との関係に同意した。以後今日まで、ブリテン国家の枠外に出ようと、切実に願つたことはなかった。

今までのところを要約しよう。「神話」からなる人々の歴史意識と、独立国の頃から受け継いだ独自の諸制度が、ビジネス界の動向とともに、スコットランドのアイデンティティを守り、またそれが国家のアイデンティティと一致するのも阻んだのである。たとえば日本の場合とは異なり、ナショナル・ヒストリー(スコットランド史)は、他の歴史(ブリテ

ン史)が補って初めて完結する。ナショナルな制度はこれを補う他の制度、すなわちブリテン議会があつて初めて現代社会に適切に対応できる。ナショナルなビジネス界もビジネスが機能するためユニオンの枠組みを必要とする。したがって、四番目の円(ネイション)への忠誠心に加えて、五番目の円(国家)への忠誠心が必要である。しかし両者は決して同一ではない。スコットランド人は二重の忠誠心を持つ。スコットランド人である点とブリテン人である点の双方が、重要なのである。

IV 二重のアイデンティティ

ところで、SNP(スコットランド国民党)は将来スコットランドが独立し、ネイションと国家のアイデンティティの一致を掲げている。しかし、一般のスコットランド人はスコットランドとブリテンの二重のアイデンティティをよしとしている。SNPがこうした状況に齒痒く思うのも、よくわかる。それゆえナショナリストは、社会が複雑になる前の中世の時代に、スコットランド人がイングランドと戦つた歴史を称揚しようとする。けれども、この二重のアイデンティティはいつ始まつたのであろうか。現在の状況を離れて、近現代のスコットランド政治史を見てみよう。スコットランドというネイションとブリテンという国家(四番目と五番目の円)のどちらに強く忠誠心を向けるかを、スコットランド人は、時折変化させてきたのである。スコットランド人がロンドン政府より不当な取り扱いを受けていると感じると、ナショナリストに投票するという手段で脅かした。しかしその目的は、経済的な譲歩を引き出すことにあつた(地域開発を促すためのスコットランド開発庁 Scottish Development Agencyもその一例である) [訳注 1974年の総選挙でSNPは11議席を得た。その翌年に開発庁が設置された。] 一連のこうした動きによって、かえってユニオンは強化されるのである。19世紀においては政治家が、スコットランドに

関する案件の処理について、スコットランド担当官とその行政府の設置を要求する一方で、同じ人物が帝国主義政策を遂行して経歴を積んだとしても、だれも疑問視しなかった。20世紀には、エディンバラにスコットランド庁が設置され、スコットランド担当官は閣僚の一員となったとはいえ、スコットランド担当相がスコットランド議会に責任を負うのではなかった。18世紀後半ではアダム・スミスからロバート・バーンズに至る著名なスコットランド人は、スミスがスコットランドへの帰属意識を示すのは稀であり、バーンズによるブリテンへの帰属意識もあまり見かけないとはいえ、どの著名人も折にふれて自分がスコットランドとブリテン双方に属している点を表明している。

二重の帰属意識はどのくらいさかのぼるのだろうか。17世紀には、「より完全なブリテンのユニオン」を提案するスコットランド人がいた。16世紀には「二つの歴史的な国家の結合」として王朝のユニオンへの弁明が書かれた。したがって二重のアイデンティティの歴史は古い。また、次の点も大いに参考となろう。アイデンティティの保持とイングランドと同盟締結という一石二鳥を実現する知的な枠組みとして、スコットランド人自身が、グレート・ブリテンという観念を発明したのである。イングランド人は、グレート・ブリテンをイングランドと同義語であると誤解しがちであるが、スコットランド人はこの観念を正確に使うようにこだわってきた。もちろん、二重のアイデンティティを強調するからといって、特に1707年以前に反イングランド感情が、たびたび強く吹き出した事実を否定するものではない。実は反イングランド感情こそ、ナショナリストとしての民衆の意識を表出しているといえるだろう。ただしユニオンが眼前に見えてくると、ブリテンという語があるので、スコットランド人は、イングランド人とは別の、独自のアイデンティティを守っていくことができた。

V ナショナル・アイデンティティと ネーションの独立

最後に二つの考察を述べたい。1707年に、スコットランドはスコットランド議会を失い、その主権は大幅に縮小した。しかしユニオンが成立しても、決してナショナル・アイデンティティは失われないと、スコットランドは三百年の間に学んできた。しかし1991年にイングランドは、もしブリテンが主権の一部でもヨーロッパ連邦に引き渡すのならば、アイデンティティも失ってしまう、という恐れに駆られた。歴史上イングランドは主権の喪失を経験したことがないので、アイデンティティの継続の可能性に考えが及ばないのである。一方、スコットランドが欧州連合に対して持つ不安は、イングランドに比べてずっと小さい。おそらくスコットランドは、欧州連合によってロンドンに依存することから心理的に逃避できるからであろう。さらに、スコットランドは歴史的な経験から、ユニオンが成立しても独自性を保持できると学んでいるため、スコットランドにとってEUは魅力ある選択肢となっている。この経験は、21世紀への貴重な教訓となろう。というのも21世紀にも恐怖と憎悪が、ナショナル・アイデンティティの問題をめぐる渦巻くと予想されるからである。そのなかで、一つの国家の中に2つ以上のネーションがあり独自でありながら共にやっていけるとの認識は、価値のあることといえよう。

ところで、スコットランドのナショナリズムは必ず失敗する、あるいは、スコットランドの独立は決して日の目を見ないと、この講演から示唆したいのではない。イングランドの歴史家ジョナサン・クラークは、革命はあたかも星に書かれているかの如く不可避に到来するのでなく、統治者側の失敗により予定外の結果として起こるのだという。たしかにそのような見方もできよう。今日労働党が提案している将来の権限委譲によって、ユニオンを強化するどころかユニオンが不安定とな

り、特に経済状況の悪化が重なれば、独立への勢いをどの政治家も止められなくなるという予想も立つ。

ただ、そうはならないだろう、というのが私の考えである。強烈なスコットランド人意識とブリテン人意識が、数世紀の間共存してきた。これを善悪の問題に帰すこともできない。SNPの政治家は、スコットランド人がサッカーの競技場で猛烈なナショナリズムを發揮しようとも、それを競技場の外に持ち出さないと嘆く。しかしナショナリズムを競技場の中に限定すること自体について、スコットランド人に道義的に問題があるとはいえない。また、熱心なスコットランドのユニオニストのいう、政治的な洞察力や生来の穏健さといった徳性でもない。スコットランド人の

複雑な帰属意識は、まさにスコットランドの歩んだ歴史の所産であり、この点を政治家や政治学者は忘れてはならないのである。

さまざまなアイデンティティの多面性や同一国家内の複数のネイションをめぐる問題は、世界中にあることを最後に付言したい。この講演では、スコットランドの事例を紹介したが、日本の皆さんにとっても興味深い内容であると考えている。

[註]

- (1)訳者は1998年に講演者スマウト教授より翻訳の許可を得た。